

1999年広島・長崎「平和宣言」の一考察
—千葉工業大学中国人留学生の意識調査結果をとおして—

小林 文男

広島大学名誉教授

広島大学平和科学研究センター客員研究員

柴田 巖

千葉工業大学人文系

**A Study on Hiroshima and Nagasaki Peace Declaration
1999, as Seen through inquiries,
for Chinese Students in Chiba Institute of Technology**

Fumio KOBAYASHI

Emeritus Professor, Hiroshima University

Affiliated Researcher, Institute for Peace Science, Hiroshima University

Iwao SHIBATA

Humanities, Chiba Institute of Technology

SUMMARY

In August 1999, Hiroshima and Nagasaki observed the fifty-fourth anniversary of the atomic bomb dropping. As usual, the Mayors of Hiroshima and Nagasaki each delivered the Peace Declarations at the Peace Memorial Ceremonies. Needless to say, Hiroshima and Nagasaki have appealed for the total abolition of nuclear weapons and the creation of lasting world peace since that fatal day.

The purpose of this paper is to verify how Hiroshima and Nagasaki's appeals which are showed in the "Peace Declarations 1999" move the foreigner on the results of inquiries for 35 Chinese students in Chiba Institute of Technology. The findings of our survey are as follows:

- [1] Only 8.6% of students were in favor of both of them.
- [2] one-fifths were for Hiroshima Peace Declaration.
- [3] 37.1% were for Nagasaki Peace Declaration.
- [4] Over 30% of students (34.3%) were in favor of neither of them.

This time, among students, 28.6% ([1] + [2]) rated Hiroshima Peace Declaration "good" or "excellent", while 45.7% ([1] + [3]) rated Nagasaki Peace Declaration in this way. Certainly, Nagasaki's rate was superior to Hiroshima's rate, however, the Hiroshima's point is the second highest in the last five surveys (49.5% in 1991). By contrast, the Nagasaki's point was the lowest in the past (down 25.7% from 1998).

Most striking of all, 34.3% of Chinese students were in favor of neither of Hiroshima and Nagasaki. This point is the worst in the last surveys.

Why they were against Hiroshima and Nagasaki Peace Declaration in 1999? The reasons are as follows:

- (1) These Peace Declarations didn't mention of Japan's War Responsibility. They believe that Japanese should not victimize oneself just because of atomic bomb, and they demand that Japanese should remember "Nanjing Massacre" and other sad incidents occurred during Sino-Japanese war(1931-45) .
- (2) They question whether the total abolition of nuclear weapons equals to a peace of the world. They hope Hiroshima and Nagasaki will appeal to all nations states not only to abolish nuclear weapons but also to abolish wars.

目次

I 本調査の意図と対象

II 1999年広島・長崎「平和宣言」に対する評価

(1) 総体的評価とその特色

(2) 広島「平和宣言」支持の要因

(3) 長崎「平和宣言」支持の要因

(4) 広島・長崎両「平和宣言」不支持の理由

III 結語 一若干の私見一

註

〔資料1〕1999年広島・長崎「平和宣言」全文

〔資料2〕1999年広島・長崎「平和宣言」全文（中国語訳）

補記：原爆を体験した旧広島文理大中国留学生

I 本調査の意図と対象

1999年8月、広島・長崎両市は54回目の原爆忌をむかえた。そして例年どおり、広島では8月6日、平和記念公園（広島市中区中島町）において「原爆死没者慰霊式並びに平和祈念式」（平和記念式典）が、また長崎では8月9日、平和公園（長崎市松山町）において「原爆犠牲者慰霊平和祈念式典」が営まれ、式典上、両市市長は国内外へ向けて同年の「平和宣言」（以下、「宣言」と略称）を發した。

1900年代の締め括りとなる今回の広島・長崎両「宣言」に寄せられたマスコミ・平和団体などの関心は、例年にもまして大きかったと言ってよい。というのも、1998年8月からこの1年間、国内外では、ヒロシマ・ナガサキの「反核・平和」の訴えを無視するかの如き事態が相次いで引き起こされたからである。

アメリカは、ヒロシマ・ナガサキの度重なる中止要請・抗議にもかかわらず、1998年9月27日、同年12月12日、99年2月10日と、臨界前核実験を3回実施、ロシアも98年9月から同年12月にかけて合計5回の臨界前核実験を強行した。さらには、98年12月の米英によるイラク爆撃、99年3月24日から78日間にわたって強行された

NATO（北大西洋条約機構）軍によるユーゴ空爆など、明らかに国連憲章を無視した軍事行動も続発した。

一方、国内に眼を転じると、1999年5月24日、「周辺事態法」をはじめとする「日米防衛協力のための指針」（新ガイドライン）関連法案が参議院で可決・成立、98年長崎「宣言」は日本政府に対して、「核の傘に頼らない真の安全保障」の追求を要請、広島「宣言」も97年に「『核の傘』に頼らない安全保障体制構築への努力を要求」していたが、同法案の成立はこれとまったく逆行する動きであった。しかも、長崎原爆忌当日には、「日本軍国主義の復活」として近隣諸国の批判を招いた「国旗・国家法」が成立、同法が、99年2月に発生した広島県の高校長の自殺を機として、十分な議論も尽くされぬまま、一気に法制化されたことは周知のとおりである。¹⁾

加えて、広島側について言えば、1999年2月の秋葉市政の誕生も、「宣言」の注目度を高めた要因の一つであろう。よく知られているように、衆議院議員から転身して戦後7代目の広島市長に就任した秋葉忠利氏は、ヒロシマ・ナガサキの実相を原爆投下国の人々に広く伝え知らせようと、1979年6月から始められた米国ジャーナリスト招請計画、いわゆる「アキバ・プロジェクト」の産みの親であり、被爆者団体・平和団体が彼に寄せる期待にはひとときわ大きいものがある。

さて、1999年「宣言」を見てみると、いくつかの点で、従来とは異なる新機軸が打ち出されたことが分かる。

まず、広島「宣言」では、はじめて「です・ます体」が採用された。これは、「若者にも分かりやすく」との秋葉市長の配慮による改革と伝えられるが、事実、筆者らが過去、広島大学において実施した日本人学生を主要対象にした意識調査によれば、広島「宣言」の「である体」は、「親しみにくい」「傲慢な感じがする」など、総じて不評であり、広島「宣言」の評価の低迷を招いた原因の一つであった。²⁾ちなみに長崎側は、1981年以来、「です・ます体」を使用し、今日に至る。また、文体の変更も一因となって、広島「宣言」の総字数は前年比約40%増、およそ千五百字に増加した。さらに、秋葉市長は8月6日夜、原爆ドーム前でとり行われたピースキャンダル（広島青年会議所主催）の場で、英語で「宣言」を読み上げた。例年、「宣言」は広島市の手で英訳され、文書で公表されてはいたものの、実際、市長によって朗読されたのは、今回がはじめてであった。

長崎「宣言」にも注目すべき変化があった。起草過程で、外国人の「声」に耳を傾けたことである。1974年以来、長崎では宣言文を作成するに当たって、市長を委員長とし、被爆者、学識経験者、市民代表らをメンバーとする起草委員会（1999年は20名で構成され、5月28日、6月19日、7月9日、7月17日の計4回開催）を設置、その場で文案の協議が重ねられてきたが、今回、その委員の一人にはじめて外国人（アメリカ人、ブレンドン・ハンナ氏、長崎市在住）が起用された。³⁾

ヒロシマがはじめて「宣言」を発したのは被爆から2年を経過した1947年、ナガサキは1948年のことであった。およそ半世紀を経て、近年、被爆者からさえ「宣言」の「マンネリ化」を指摘する声が出ているだけに、今回、広島・長崎両市が21世紀を目前にひかえて、より若者、世界にアピールする「宣言」を、と趣向を凝らした跡がうかがわれる。

とはいえ、以上はいわば形式面での変化であって、問題がその内容如何にあることは言うをまたない。そこで、筆者らは1999年10月、千葉工業大学に在籍する中国人留学生を対象に意識調査を実施、1999年広島・長崎両「宣言」に対する感想・評価を求めた。本稿では、その結果に基づいて、両「宣言」の特色ならびに問題点を明らかにしたい。ちなみに、筆者らの「宣言」をめぐる意識調査の実施は、1990年、91年、92年、93年、98年に続いて第6回目であり、過去の調査結果は、その都度公表、両市平和行政に提言を行ない、マスコミにも、しばしば取り上げられた。⁴⁾

ここで、今次調査に応じた被験者ならびに調査方法について若干の説明を加えておきたい。

被験者は、千葉工業大学と学術交流協定を締結するハルピン工業大学、吉林大学、北京理工大学から1999年4月に来日・入学した留学生35名（うち女子学生4名）であり、年齢は18-21歳、全体の平均は19.5歳である。

調査は、自由記述のレポート方式で行い、1999年度後期の共通科目「日本語初級2」（柴田担当）の宿題とした。提出期限は1週間以内、出題に当たっては、前年の調査において、評価不明の回答が若干ながら見られたことから、各「宣言」に対する被験者の評価・支持がより明確に把握できるよう配慮した。今回の課題は以下の通りであるが、被験者35名全員の日本語学習歴が1年未満であることを考慮し、被験者らに配布した広島・長崎「宣言」全文〔資料1〕には、あらかじめ筆者らが中国

語に訳したもの〔資料2〕を添付し、回答も日本語、中国語の双方を認めることとした。

「1999年8月6日の広島『平和宣言』と同年8月9日の長崎『平和宣言』を熟読し、それぞれの特徴ならびに両者の相違点を分析して、原稿用紙4、5枚にまとめなさい。両『宣言』に対する自身の評価も明記すること。なお、回答は日本語でも中国語でもよい」

今次被験者の来日直後に行なったアンケート調査によれば、広島・長崎の被爆の史実については、全員が「知っている」と回答したものの、原爆忌当日の式典開催の認知度は56.4%（98年は59.5%）、「宣言」のそれは21.0%（98年は24.3%）に激減、「宣言」を読んだことがある者に至っては、皆無（98年も同じ）であった。⁵⁾したがって、ヒロシマ・ナガサキの現状に対する被験者らの理解は、必ずしも十分であるとは言いがたく、今回の調査においても、初めて「宣言」に触れた彼らの回答には、皮相的な見方が散見されるのも事実である。また、被験者総数35名という小規模な調査ゆえ、これをして「世論」と見るができないことは言うまでもない。

しかしながら、「私は平和な時代に生まれ、戦争の経験もありません。以前、自分の頭の中で第二次世界大戦と広島、長崎への原爆については具体的な印象がありませんでした。それに『平和宣言』もあまり知りません。先生からいただいた『広島平和宣言』と『長崎平和宣言』を読んだあと、これらの問題を真剣に考えて行くことになります」（女子・日本語）をはじめとして、多くの被験者が本課題に真摯に取り組んでおり、各回答にはそれぞれ先入観にとらわれない見方、率直な感想が多数記されている。これらは今後の「宣言」起草にも大いに参考となろう。また、前記アンケート調査結果に示されるとおり、両「宣言」は半世紀以上の歴史を有しながらも、その世界的認知度は今日なお、それほど高くないと推察されるだけに、今次調査結果は、「宣言」を初見した外国人一般の感想を把握するうえでも、決して無意味ではないと考える。

なお、本文中、被験者が日本語で記述した回答を引用するに際しては、できる限り彼らの「生の声」を伝えるため、訂正は誤字・脱字など最小限に止めることとする。

II 1999年広島・長崎「平和宣言」に対する評価

(1) 総体的評価とその特色

では、今次被験者は、1999年広島・長崎「宣言」をどう読み、いかなる評価を与えたか。被験者35名が両「宣言」に下した評価を、「両『宣言』ともに評価する」「広島『宣言』をより評価する」、「長崎『宣言』をより評価する」、「両『宣言』ともに評価しない」に分類すると、その結果は表1のようになる。

表1 1999年広島・長崎「平和宣言」の評価

評 価	実 数	%
両「宣言」ともに評価する	3	8.6
広島「宣言」をより評価する	7	20.0
長崎「宣言」をより評価する	13	37.1
両「宣言」ともに評価しない	12	34.3

一見して、長崎「宣言」が広島「宣言」より高い評価を得たことが分かる。長崎「宣言」の支持率は、「長崎『宣言』をより評価する」に「両『宣言』ともに評価する」を加えると、45.7%、一方、広島「宣言」のそれは、28.6%であった。

いまこれを、1990年から93年にかけて日本人学生を主要対象に実施した調査結果ならびに98年に中国人学生に行なった調査結果と併記し、その時系列的变化をたどると同時に、1999年「宣言」に与えられた評価の特色を明らかにしたい（表2、表3参照）。

表2 広島・長崎「平和宣言」支持率の推移

評 価	1990年	1991年	1992年	1993年	1998年	1999年
両「宣言」ともに評価する	12.3	47.2	2.9	5.1	17.1	8.6
広島「宣言」をより評価する	0.8	2.3	0.3	6.1	2.9	20.0
長崎「宣言」をより評価する	68.7	50.5	96.8	72.7	54.3	37.1
両「宣言」ともに評価しない	0.5	0	0	16.1	20.0	34.3

(単位：%)

表3 「平和宣言」支持率の較差

年	較差 (長崎-広島)
1990年	67.9
1991年	48.2
1992年	96.5
1993年	66.6
1998年	51.4
1999年	17.1

(単位：%)

両「宣言」の支持率の接近が、広島「宣言」が1991年の50.0%につく高い評価、28.6%を得たこともさることながら、それ以上に、長崎「宣言」の評価が過去最低の45.7%に止まったことに起因することである。従来、長崎「宣言」は日本人学生を対象とした調査で、常に8割以上の高支持を獲得、中国人留学生への調査でも7割以上の被験者から好評を博していたことを想起しておきたい。

そして、特色の第三は、「両『宣言』ともに評価しない」との否定的立場に立つ被験者が過去最高の34.3%にもなったことである。中国人青年の「宣言」に対する見方が日本人学生以上に厳しいことは、すでに「1998年調査」で指摘したとおりであるが、今回はさらに厳しさを増し、前年比14.3%増で過去最悪を記録した。

以上が、1999年広島・長崎両「宣言」に中国人留学生が下した総体的評価の特色である。では、彼らは両「宣言」のいかなる点を支持し、またどこに疑問を感じて、かくなる評価を与えたのか、以下、各「宣言」について考察を進めたい。ただ、被験者の論点は極めて多岐におよんでおり、紙幅の都合上、ここで全意見を取り上げることは到底困難である。したがって筆者らの考察も、より多くの被験者の注目を集めた点を中心とせざるを得ないが、たとえ少数意見であっても、特筆すべき所見については随時紹介を行なうこととしたい。

(2) 広島「平和宣言」支持の要因

1999年広島「宣言」は、同年5月、秋葉市長がオランダで開かれた、「世界市民会

1999年広島・長崎両「宣言」の得た総体的評価の特徴として、大きくは以下の3点を挙げることができる。

まず、過去5回の調査において、常に長崎側よりも評価が低迷し続けてきた広島「宣言」は、今回もまた、長崎「宣言」の支持率に及ばなかった。とはいえ、ここで注目に値するのは、その支持率の較差=17.1%が、これまで最小であった1991年=48.2%よりも大幅に縮まったことである、これが第一。第二は、

議「ハーグ平和アピール1999」に出席した際の英語講演を下敷きにしたと言われる。「宣言」の大半は、被爆者のたどった苦難の足跡の描写にさかれ、例年、盛り込まれてきた内容、たとえば「原爆ドームの世界遺産化」(1997年)、「広島平和研究所の新設」(1998年)など、その1年間のヒロシマのトピックや、核をめぐる世界情勢をふまえて国内外へ向けてなされてきた、「非核三原則の法制化」「核兵器使用禁止条約の締結」などの具体的な政策提言は、「個別の提言は6日の首相要望など別の方法で国に伝えたい」「新聞やテレビで報じることをあえて宣言でコピーする必要があるのか」とする市長自身の考えで削除された。⁶⁾1999年広島「宣言」が、「にじむ『秋葉カラー』」と評されたゆえんである。⁷⁾

さて、前述の如く、今回、広島「宣言」支持を表明した被験者は、「両『宣言』ともに評価する」「広島『宣言』をより評価する」を併せて、10名(28.6%)であるが、彼らが広島「宣言」を評価する根拠は、表4のとおりである。

まず、広島「宣言」を支持する理由として、3名の被験者が文章の構成を、4名が「意志さえあれば、必ず道は開けます」との文言の存在、これへの共鳴を挙げた。以下、それぞれの代表的見解を一例ずつ掲げておく。

「広島宣言は、まず冒頭で今世紀を戦争の世紀と規定、次いで原爆の悲惨と被爆者の勇気を描き、そして最後に我々現代に生きる者たちの課題を提示している。冗長な感じがする長崎宣言に比べて、実に明快で分かりやすい。また、被爆者の足跡を三つに分けて論じている点などにも工夫の跡が見られ、おそらく日本の子供にも広島宣言の方が理解しやすいのではなからうか。文章は分かりやすさが命である」

(男子・中国語)

「僕が広島の『平和宣言』がよいと思うのは、『意志さえあれば、必ず道は開けます』という文に感動したからです。ご存じのとおり、世界はもうすぐ21世紀になります。21世紀は私たち若い者の時代です。20世紀は戦争の世紀でしたが、21世紀は平和の世紀になるように、僕達は頑張りましょう。広島の『平和宣言』は、

表4 広島「宣言」支持の理由

項目	実数
文章の構成	3
意志さえあれば	4
被爆者中心	8
その他	1

(単位：人、複数回答)

世界の若い者に、平和な時代をつくる意志を持ってくださいと言っているので、私は若い者の一人として、うれしく感じるし、頑張ろうと思います」

(男子・日本語)

さて、広島「宣言」に対する支持理由として、最も多かったのが、被爆者の力強い足跡に感動したというものであった。被験者のなかには、「宣言」を通して、今回はじめて被爆者の実情を認知した者が少なくなく、どの回答にも青年らしい新鮮な感動が書き綴られている。少し長くなるが、「宣言」が平和教育の教材として大いに有効であること、また留学生に平和教育を行なう場合に留意すべきことなどを示唆する貴重な資料と思われるので、以下、4例紹介しておきたい。

「原子爆弾で亡くなった人を不幸と言うのであれば、生き残った人々はさらに不幸と言わねばなるまい。なぜなら、彼らは愛する家族、友人らと切り裂かれるという、想像を絶する生き地獄を体験せねばならなかったからである。しかし、彼らはそこで絶望しなかった。核兵器のない世界を目指して、立ち上がったのである。後世の人々に同じ苦しみを与えまい、なんと尊い精神であろう。広島の平和宣言は、人間のすばらしさを教えてくれ、私に勇気を与えてくれる」

(男子・中国語)

『「広島平和宣言」』は被爆者の受けた苦しきから核兵器の危害を説明します。読者はその内容に感動させられます。同時に、核兵器の危害も分かりました。『長崎平和宣言』の中で『核兵器を廃絶』という言葉があるだけですから、読者は無味乾燥な気持ちを持っています。だから、趣味の見地から、『広島平和宣言』のほうがよいです」

(男子・日本語)

「ふたつの『平和宣言』を比べれば、『長崎平和宣言』より『広島平和宣言』のほうがもっとよいと思います。被害者の角度から書けば、読者が同情や共鳴な感情になりやすい。これによって『広島平和宣言』の影響力が大きくなると思います。読者が自然に被爆者の立場を支持して、積極的に核武器に反対します。『宣言』というものは人の共鳴を引き起こすのを目的にするものです。影響力において、『広島平和宣言』のほうがよりよいと思います」

(男子・日本語)

「広島にせよ長崎にせよ、核兵器のない世界を求める気持ちに変わりはない。ただ、『広島平和宣言』は、ストレートにそれを訴えるのではなく、被爆者の体験

した54年前の苦しみや恐怖を描くことで、世界の人々に核兵器の恐ろしさを悟らせようとしている。私は一日も早い核兵器のない世界の到来を願うものであるが、核保有国はそれぞれ莫大な代価（人命、費用を含む）を支払って、核兵器開発に成功したのであって、それゆえ核兵器保有を自国の誇りとする人々も少なくない。こうした人々に、長崎のように「核兵器は悪い」「核兵器はだめだ」と言っても、かえって反発を招くだけではないか。「広島平和宣言」は、一応、核兵器賛成論者にも聞いてもらえるであろうし、文章の技巧として実に巧みだと思う」

（男子・中国語）

ただ、今次広島「宣言」が被爆者の足跡を柱としたことについては、2名から次のような否定的見解が寄せられたことも事実である。前者は長崎「宣言」支持派、後者は両「宣言」ともに不支持を表明した被験者の回答の一節である。

「先生は『平和宣言は世界の人々に向かって出した』と言ったが、実際、広島『平和宣言』を読んで、ちょっと違うと思った（すみません）。広島『平和宣言』は被爆者に向かって書いたでしょう。被爆者のことをたくさん書いているから、被爆者は感動するかもしれないけど、私は被爆者じゃないから、あまり関心が持てなかったんです。長崎の平和宣言は、視野が広いし、世界の人々に向かって出したと思います」

（男子・日本語）

「『広島平和宣言』の中では、主に被爆者を通して、感謝の気持ちを表し、そして全世界への平和を求めます。けれども、広島と長崎が原子爆弾の被害に遭った後、核兵器が使われなかったのは被爆者だけのおかげなのでしょう。いいえ、私は平和を愛する世界の人々のおかげだと思います。被爆者の貢献が大きいのはそうだと思いますけど、被爆者だけに感謝するのはちょっと狭隘的すぎると思います」

（女子・日本語）

(3) 長崎「平和宣言」支持の要因

今回の調査で、長崎「宣言」が広島「宣言」よりも高く評価された主因は、内容の具体性、広い平和観、アジア・太平洋諸国に対する侵略・加害への言及の3点にある。表5は、各項目の該当者数である。

1999年広島「宣言」が市長独自の判断で、核をめぐる世界情勢の分析、政策提言

などを省略したことは、すでに見たとおりであるが、長崎「宣言」に一定の評価を与えた16名のうち、5名がこれをもって広島宣言は「分かりにくい」「目標が不明確」などとし、長崎側を支持する論拠としている。以下は、その典型である。

「長崎『平和宣言』は54年前の原爆から、簡潔な言葉で原爆の過程を述べます。それから世界へ広げて、インドとパキスタンの地下核実験とNATOが核兵器使用を示唆したことを批判します。私はこの『宣言』のように今の時勢と緊密に結びつけることが大切だと思います。『平和宣言』は毎年発表されます。毎年の情勢を分析して戦争を起こさないように宣言します。時勢と結びつけることは、『宣言』をわかりやすくするための一番大事なポイントです。それから、そうでないと、毎年、違った宣言を発表する意味がありません」と
(男子・日本語)

「長崎『平和宣言』は、このごろ核兵器をめぐる世界の情勢が緊張の度合いを高める事実について、核兵器の廃絶は差し迫ってきていることを強調する。核威嚇は時代錯誤であるのを指摘する。でも、広島『平和宣言』のほうは、核兵器を廃絶する原因はそれが絶対悪というだけで、浅いと思う。大切なのは、原因を探すことである。絶対悪ばかり言っても、無駄だと思う。……また、長崎『平和宣言』は市民の核廃絶する意志をよく表しているし、具体的な措置も提出し、核兵器の廃絶の目標は明るくなる」
(男子・日本語)

今回、1999年長崎「宣言」を支持する最多理由は、広島「宣言」の訴えが「反核」中心であるのに対して、長崎「宣言」はより広い視野から「世界平和」を追求・主張せんとしているというものであった。8名の論調は以下の回答2例に代表されると言ってもよい。

「両者の特質から見たら、広島『平和宣言』は被爆者として、被爆者の立場から核兵器の絶対悪を譴責します。一方、長崎『平和宣言』は原爆されたことから、世界の平和を求めようと言っていました。広島『平和宣言』は核兵器を譴責する一方です。しかし、長崎は核兵器から世界の平和のために宣言しました。簡単に

表5 長崎「宣言」支持の理由

項目	実数
内容の具体性	4
広い平和観	8
侵略・加害	5
その他	2

(単位：人、複数回答)

言えば、両方それぞれの特徴は、広島の方は『廃核』で、長崎の方は『求和』だと思います。両方の名前は『平和宣言』ですから、『廃核』だけではなくて、『平和』ということの世界中に広く知らせるべきです。長崎『平和宣言』は核兵器から世界平和まで押し広めますので、私は長崎『平和宣言』がよいと思います」

(男子・日本語)

「広島『平和宣言』の視点はあまりにも狭い。考えてほしい、人類を傷つけるのは核兵器だけであろうか。世界には銃刀があふれ、これらは個人の喧嘩でも使われるし、国家の地域紛争・戦争でも使用され、無辜の民を傷つけ、悲劇を招くのである。もちろん、世界から銃刀をなくすに越したことはないが、それは無理な話であろう。とすれば、世界が平和であるために、最も肝要なことは、個人と個人の対立、国家と国家の対立をいかに平和裡に解消するかである。その方法として、長崎『平和宣言』は、『民族、宗教、文化の違いを互いに尊重し、認め合い、対話によって信頼を培うこと』を訴えているが、まったくその通りである。人間には素晴らしい知恵がある。21世紀に向けて、いま我々人類は、武力でなく、知恵を出し合うことが求められている」

(男子・中国語)

過去、広島「宣言」と長崎「宣言」の評価に、大きな差が現れた要因は、そのアジア認識の差異、具体的には、過去の日本のアジア・太平洋諸国への侵略・加害の歴史に対する言及の有無、反省表現の相違にあった。今次の意識調査において、これに着目して、長崎「宣言」支持を表明した被験者は5名である。

「私は『長崎宣言』を支持したい。周知の通り、日本はかつてアジア諸国を侵略し、罪なき人々の身上に甚大なる被害をもたらした。被害者は、何も被爆者だけではないのである。『長崎宣言』は自らの罪を謙虚に認めたくえて、世界に平和を訴えている。広島の人々には、なぜ原爆が投下されたかをよく考えてほしい。日本が戦争を引き起こさえしなければ、原爆を投下されることもなかったのである。自らの過ちを認めぬ者のところに、人は集まらないし、集まるはずがない。長崎の『平和宣言』が完璧だとは思わないが、少なくとも世界の戦争被害者の連帯を築くきっかけになり得るのではないか」

(男性・中国語)

「『広島宣言』と『長崎宣言』の違いを一言で言うなら、アジア・太平洋諸国を侵略したかつての自国の歴史を反省する態度、気持ちの有無であろう。もし他人

を説得しようとするなら、まず自らを顧みることこそ必要ではないか。自分の言いたいことだけ一方的に訴える、それで一体、誰が耳を傾けてくれるであろうか。その意味で、「広島宣言」はまことに身勝手であり、私は一読して、反感すら覚える」
 (男性・中国語)

「『長崎平和宣言』には、アジア・太平洋諸国に対する侵略ならびに加害への反省が見られる。これは、第二次世界大戦の敗戦国である日本にとって容易なことではないであろう。なぜなら、被害者はたとえ自分に落ち度があったとしても、けっしてそれを認めたくないのが、人間の情であるから。私は、長崎の真摯に歴史に向かい合おうとする態度に敬意を表したい」
 (男性・中国語)

以上3点が、今回、長崎「宣言」を支持すると答えた被験者らの主だった支持理由であるが、すでに指摘したように、1999年長崎「宣言」に与えられた評価の最大の特色は、その支持率が過去最低に止まったことにある。問題は、その原因であるが、いまこれに分析を加えると、過去、被験者から圧倒的支持を得た、長崎側のアジア認識・歴史認識が今回、さほど高く評価されなかったことが明白となる。例えば、そのことは過去のデータと比較してみると一目瞭然である(表6参照)。

表6 広島・長崎「平和宣言」に見られるアジア認識・歴史認識

	全被験者数	広島をより支持	長崎をより支持
1990年	367	0	310
1991年	428	1	179
1992年	344	0	274
1993年	311	6	187
1998年	37	0	17
1999年	35	0	5

(単位：人)

繰り返しになるが、1999年長崎「宣言」に盛り込まれたアジア認識・歴史認識に関する表記、すなわち、「アジア・太平洋諸国に対する侵略と加害の歴史を反省し、日本国憲法の平和理念を守ることを誓い、真の相互理解に基づく信頼関係を築いてください」との一文は、35名の被験者のうち、5名の支持しか得られなかった。

1990-93年に見られた高い評価からの凋落ぶりもさることながら、同じく中国人留学生を対象にし、被験者数もほぼ同等であった1998年の調査結果と比較しても、今次評価の低迷は明らかである。なにゆえ、上記「アジア・太平洋……ください」の文言が、例年ほど注目・評価されなかったのか、前年からの評価の低下をもたらした要因はこの表現のどこにあるのか、これらは実に興味深い問題であるものの、残念ながら、被験者のうち、前年の「宣言」との比較を試みた者が見当たらないため、今次意識調査の結果からは究明し得ない。ここでは、1998年長崎「宣言」が、日本の侵略・加害についてどう述べていたか、当該箇所を想起するに止めたい。

「アジア・太平洋諸国への侵略と加害の歴史を直視し、その反省の上に立って、アジア諸国と歴史認識について率直に話し合い、信頼と相互理解に基づく新しい友好関係を一日も早く築いてください」

しかも、重要なことは、こうした長崎「宣言」のアジア認識・歴史認識にかかわる評価の後退が、「両『宣言』ともに評価しない」とする被験者の増加を招く一因になっていることである。次節では、それを見てみたい。

(4) 広島・長崎両「平和宣言」不支持の理由

冒頭でも触れたとおり、1999年広島・長崎「宣言」に下された評価のうち、何と言っても注目されるのは、「どちらの平和宣言も意味がないんです」（日本語・女性）、「先生はどちらの『宣言』がいいですかとおっしゃいますけど、僕は困って、選びにくいです。だってどちらも大きい問題があるからです」（日本語・男性）をはじめとして、「両『宣言』ともに評価しない」との立場を表明した被験者が35名のうちの12名、34.3%という、過去、例のない高率に達したことである。いま、この12名の回答を吟味すると、彼らが両「宣言」を支持せぬ理由が二つあることが判明する（表7参照）。

その第一は、広島・長崎「宣言」ともに、かつてのアジア侵略戦争への反省が見られない、と両「宣言」を批判する者であり、これが最も多く8名にのぼ

表7 広島・長崎「平和宣言」不支持の理由

項 目	実数
侵略戦争への反省がない	8
平和宣言の名に値しない	7

(単位：人、複数回答)

る。前述したとおり、「長崎『宣言』には反省が見られる」とし、同「宣言」支持を表明した者が5名いたが、それを上回る8名は、1999年長崎「宣言」に見られた一文を「反省」とは見なさず、下記回答に示される如く、両「宣言」に向けて、実に厳しい批判の声を寄せている。

「両宣言は、被爆国としての立場から核兵器の全廃を要求しているが、なぜ広島・長崎に原爆が投下されねばならなかったかを考えるべきであろう。私は広島と長崎に関する資料を調べているうちに、広島が当時の軍都であり、長崎も軍事産業で栄えた都市であったことを知った。両市は、いわば日本軍国主義の心臓部であったのである。ゆえにアメリカは両都市に原爆を落とした、私はこう考える。両宣言を見ると、広島・長崎は、ある日突然、原爆に遭い、廃墟と化したような書き方をしているが、これは歴史を歪曲しているのではないか。被爆者に罪はないとはいえ、日本は被害者である前に、加害者であった。とすれば、広島・長崎も、核廃絶を訴える前に、まず中国、朝鮮、東南アジアに対する残忍非道な行為を認め、謝罪するべきである。それが、歴史に忠実な態度であろう」

(中国語・男性)

「両市の平和宣言は、自らの被害しか語っていないが、まさかアジアで重ねた罪業の数々は忘れてしまったのであろうか。それとも知らないふりをしているのか。南京大虐殺、重慶爆撃、万人坑。日中戦争下、中国では無辜の一般市民が犠牲になった。犠牲者の数は、広島・長崎どころではない。平和宣言は日本人向け、それも歴史に無知な日本人に向けて書かれているとしか思えない。こんなものを世界に出したら、反発をかいこそすれ、共感など得られるはずがない。とくにアジア、アメリカでは。……最後に、日本人に言いたい。アメリカが貴国に原爆を投下したのには、戦争の早期終結という、ある程度、正当な理由があったのですよ、と。被爆は自業自得なのですよ、と」

(中国語・男性)

「第二次世界大戦中、世界には多くの広島・長崎がありました。もちろん、原子爆弾の原因ではないですけど。希特勒の猶太人に対する屠殺（ヒトラーのユダヤ人虐殺—引用者）とか、南京大屠殺（南京大虐殺の中国側呼称—引用者）とかです。広島・長崎よりたくさん人が殺されたんです。だから、被害者は広島・長崎だけではないんです。殺す方法は違いますが、人間の命は同じです。家族が

死んだり、友達か死んだりしたのも同じです。でも、違うところもあります。ドイツ人は反省しましたが、日本人は反省しません。二つの『平和宣言』も同じ。長崎の『平和宣言』は『アジア・太平洋諸国に対する侵略と加害の歴史を反省』というけど、日本政府に求めているので、自分が反省しているかどうか分からない。大切なのは、自分で反省します」
(日本語・女性)

広島・長崎両「宣言」不支持の理由の第二は、「平和宣言は、反核よりも反戦をこそ訴えるべきではないか」と、両「宣言」に対して疑念・要求を提示するものである。

「核兵器が使用されるのは、改めて言うまでもなく戦時である。広島ならびに長崎の惨劇も、第二次世界大戦下に発生したのである。ヒロシマ・ナガサキには、そのことを銘記してほしい。戦争が起きなければ、核兵器がたとえあったにしても、使われることはない。核廃絶には、私ももちろん賛成するが、核保有国に、いますぐ全核兵器を放棄せよと言っても、無理な話であろう。ある国にとっては、核兵器は国宝以上に貴重なものであり、国民の誇りでもある。とすれば、いまヒロシマ・ナガサキがやるべきことは、核兵器の使われる状況を未然に防ぐこと、すなわち戦争反対を叫び、行動することではないか。それでこそ、現実を直視した、真の平和宣言と言える」
(中国語・女性)

上記回答に代表される、両宣言は「反核に優先して、まず反戦を訴えるべき」と考える被験者が、前年の4例よりも増えた背景には、1999年3月から同年6月まで断行された、NATO軍によるユーゴ空爆があったと考えられる。なぜなら、7名のうち4名が回答のなかで、この問題を取り上げ、ヒロシマ・ナガサキへの批判・不審の念を表明しているからである。

周知のとおり、NATO軍とは言っても、実際にはアメリカ主導で進められた一連の対ユーゴ攻撃に、中国政府は当初から反対を表明、しかも5月7日に至って、それは決して「対岸の火事」ではなくなる。同日深夜、ベオグラードの中国大使館が「誤爆」を受け、新華社通信の女性記者と『光明日報』特派員夫妻の計3名が死亡、重軽傷者20数名を出す惨事が引き起こされたからである。これを機に、米中関係は一気に冷却化、中国の反米感情は高揚し、北京、上海、広州など全国各地で学生らによる抗議デモが繰り広げられた。

とまれ、本件の発生は、被験者に大きな影響を与え、それが「宣言」のあり方を問い、1999年広島・長崎両「宣言」を否定する論拠ともなっている。例えば、次の回答には、それが如実に現れている。

「両『宣言』を読んで、期待外れ、失望を感じずにおれなかった。どちらも『核兵器反対』の一点張りだからである。広島も長崎も、世界から核兵器がなくなれば、平和が到来するかのような錯覚に陥っているのではないか。平和な社会を創造するためには、まず戦争を消滅することである。……私の一番の不満は、長崎『宣言』が、『ユーゴスラビア空爆に際して、NATO（北大西洋条約機構）側が核兵器使用を示唆したように、世界は危険な道をたどろうとしています』と論じていることである。長崎市長に聞きたい。ユーゴスラビア空爆は、核兵器が使われようとしたから悪いのですか。あなたは核兵器さえ使われなければ、戦争を容認するのですか、と。各種兵器の破壊力は日進月歩でますます強力となり、今日、一般市民が巻き込まれない戦争などあり得ないことは自明の理である。……広島・長崎市民は、原子爆弾が無辜の人々の命を奪ったことを問題視するなら、アメリカがユーゴの市民や我々中国人の命を奪ったことも問題視してほしい。しかし、『宣言』を見るかぎり、広島も長崎も、アメリカには何ら抗議をしていないようである。日本政府と共同歩調をとっているのか、アメリカを恐れているのか、それとも異国の事件なので関心がないのか、私にはよく分からないが、いずれもまともな理由にはならない。……被爆地として戦争の恐怖、非人道性を身をもって知る両都市には、国・地域、理由の如何を問わず、いかなる戦争にも反対する強い意志と決意を示してほしい。そうすれば、ある国の政府には白眼視されることがあっても、世界の市民の圧倒的多数は広島・長崎を支持し、いずれは不動の信頼を勝ち得ることができるのではないか。ぜひ両市には、世界初（？）の反戦都市になってほしいと期待する。貧困、飢餓、環境破壊にしても、戦争に起因することが多いのである」

（中国語・男性）

III 結語 一若干の私見一

以上、1999年広島・長崎両「宣言」の特色について、中国人留学生に実施した意

識調査の結果に基づいて分析を進めてきた。広島・長崎両「宣言」の評価、各「宣言」の問題点については本論で詳論したので、これ以上の敷衍は避けるが、本考察から得た諸結果のうち、最も重要なのは、被験者のうち3名に1名が、「両『宣言』ともに評価しない」と回答したことであろう。

本稿を終えるに当たって、こうした「宣言」そのものの存在意義が問われている「危機的状況」にどう歯止めをかけ、いかに打開してゆくかについて、以下、筆者らの私見を若干述べてみたいと思う。

まず、今回、長崎「宣言」の評価を落としたばかりか、両「宣言」不支持派の増大を招く要因ともなった、長崎「宣言」のアジア認識、歴史認識についてである。長崎「宣言」は、本島等・前市長時代の1989年、太平洋戦争への反省を表明したのに続いて、翌90年には、「日韓併合」「日中15年戦争」「太平洋戦争」への反省に加えて、戦争犠牲者に対する補償を取り上げ、さらに外国人被爆者に対して謝罪の意も表明した。

こうして長崎は広島には見られない、独自のアジア認識、歴史認識を構築するに至ったものの、その認識も94年を最後に、著しく後退することとなった。たしかに、95年「宣言」にも、「アジア太平洋諸国への侵略と加害」「厳しい反省」などの字句は見られたものの、戦争被害者への「償い」や「強制連行」「中国、朝鮮」などの具体的表記は削除された。その後も、長崎「宣言」のアジア認識、歴史認識はじりじりと後退の一途をたどり、今日に至ったと言ってよい。それが、市長交替のみによるかどうかは確定し得ないが、長く起草委員会の委員を務める鎌田定夫氏（長崎平和研究所所長）の次の証言に、ナガサキの置かれている今日的状況の複雑さを垣間見ることができる。⁸⁾

「日本政府へは、『アジア・太平洋諸国に対する侵略と加害の歴史を反省し、日本国憲法の平和理念を守ることを誓い、真の相互理解に基づく信頼関係を築いてください』と要求した。例年こは右と左から追及されるところだが、精一杯の表現だ」

いずれにせよ、要は、ヒロシマはもとより、ナガサキにしても、いまだ確固たる歴史観を確立し得ていないということであらう。

次に、「反戦」の意志が見られない、と両「宣言」が批判を受けた点であるが、「宣

言」の歴史を顧みると、かつての「宣言」は決して「反核」一点張りではなかったことが分かる。例えば、1947年、浜井信三市長（当時）によって読み上げられた広島最初の「宣言」は、原爆を戦争を終結に導いた「不幸中の幸い」としているところなどに問題はあるにせよ、「戦争の惨苦と罪悪とを最も深く体験し、自覚する者のみが、苦悩の極地として、戦争を根本的に否定し、最も熱烈に平和を希求するものであるから……」「この地上より、戦争の恐怖と罪悪を抹殺して、真実の平和を確立しよう」「永遠に戦争を放棄して、世界平和の理想を地上に建設しよう」など、文章全体の基調は「反戦」の意志によって、貫かれていた。

これとて問題がないわけではないが、少なくとも、今次調査において現れた、「平和宣言はその名に値しない」というような批判は解消されるであろう。新たな趣向を凝らすのもよいが、ヒロシマもナガサキもいま一度、原点に立ち返ってみてはどうか。

もっとも、「宣言」をめぐって明るい兆しがないわけではない。一つは、これまで市長および側近の間で協議・作成されてきた「宣言」に、市民の「声」を取り入れようとする、広島の動きである。これについて、秋葉市長は8月3日、「宣言」骨子発表の記者会見の席上で、「今年は豪雨災害などで時間的余裕がなく、これまでの起草方法を踏襲した」、次回以降の手法については「今年の8・6が済んでから検討する」と語っている。⁹⁾

いま一つは、従来、「宣言」を常に「是」とし、その報道にも絶賛ぶり目立ったマスコミに、今回はじめてそれを批判的に検証しようとする姿勢が現れたことである。以下は、広島の地元紙『中国新聞』の社説の一節であるが、「宣言」に対して、かくなる注目すべき論評を加えている。¹⁰⁾

「秋葉忠利市長が式典で発した就任後初の平和宣言は『被爆者の足跡』に大半をさいた。『過ちは繰り返さない』原爆慰霊碑の誓いと憲法精神の『具現化』に立ち返るためだ。戦後世代が73%に増え、被爆体験の風化が心配されるだけに、核兵器を『絶対悪』と位置づけた取り組みを振り返り、核兵器廃絶の『強い意志』を若者らにアピールする狙いは理解できる。『憲法の前文ののっとなって各国政府を説得し、世界的な核兵器廃絶の意志を形成』するよう政府に求めたのも今年の特徴だ。背景にはハーグの世界市民平和会議で、憲法の理念の採用を各国政府に求

める決議が採択されたことが挙げられる。平和憲法の世界化への働きかけは歓迎したい。これまでの平和宣言は、その年のヒロシマを取り巻く情勢に触れ、その課題を掲げてきた。しかし今回は情勢分析が省かれ、時代を映す宣言の意味が薄れたような気がする。さらに市民が『強い意志』を踏まえて何をすべきかの具体的な目標も示してほしかった」

いま、この批評の当否は問わない。ただ、「時代を映す宣言の意味が薄れた」と批判し、「具体的な目標も示してほしかった」と注文をつけたことは、画期的と言ってよい。「宣言」が「マンネリ化」しているとするれば、それは、これまで「宣言」を絶賛してやまなかったマスコミにも責任の一端はあり、そもそも筆者らが1990年に、「宣言」を題材とした意識調査を開始したのも、こうしたマスコミの報道姿勢に疑問を感じたからにほかならない。

「宣言」の「マンネリ化」について付言すれば、その責任の大半が、それを「出しっぱなし」にしてきた両市行政にあることは言うまでもない。「宣言」を発する以上、その反響を調査し、把握することは当然の責務であり、「マンネリ化」はそれを怠ってきたことの「付け」にほかならない。今回にしても、被爆者の足跡を詳述した広島「宣言」は、当の被爆者にはどう評価されたのか、また、新たにアメリカ人を起草委員に加えた長崎「宣言」は、「原爆正当化論」を譲らぬアメリカで、果たしてどう受けとめられたのか、実に興味深い問題であり、行政の責任において明らかにされるべき課題である。

筆者らの調査も、今後、ヒロシマ・ナガサキの有識者の協力を得るなどして、対象をさらに拡大し、両市行政へ提言を続けていきたいと思う。

註

- 1) 小林「『日の丸・君が代』と日本の将来(上)」、『月刊状況と主体』284号, 谷沢書房, 1999年7月, pp. 30-39。下編は, 同誌285号(1999年8月, pp. 37-47)に連載。
- 2) 過去の調査結果については, 小林・柴田「1990年ヒロシマ・ナガサキ『平和宣言』の一考察——広島大学学生の意識調査をとおして——」(本紀要13号, 1990年, pp. 41-84), 小林・橋本学・柴田「1991年広島・長崎『平和宣言』に関する一考察——広島大学学生428名の意識調査をとおして——」(『九州の平和研究』第2集, 日本平和学会・九州地区研究会, 1992年4月, pp. 71-99), 小林・橋本・柴田「広島・長崎『平和宣言』の比較——1990年~1992年, 広島大学学生への意識調査結果を中心に——」(鎌田定夫編著『広島・長崎の平和宣言——その歴史と課題』, 平和文化, 1993年3月, pp. 165-226), 小林・橋本・柴田「1993年広島・長崎『平和宣言』の一考察——広島大学学生311名の意識調査結果をとおして」(本紀要16号, 1993年, pp. 41-84), 小林・柴田「中国人留学生のヒロシマ観に関する一考察——千葉工業大学中国人留学生の意識調査をとおして——」(本紀要21号, 1999年, pp. 239-272)を参照されたい。
- 3) 『長崎新聞』, 1999年7月21日朝刊。
- 4) 例えば, 前掲「中国人留学生のヒロシマ観に関する一考察——千葉工業大学中国人留学生の意識調査をとおして——」は, 『朝日新聞』(1999年6月10日付夕刊, 東京本社版), 『長崎新聞』(1999年8月14日付朝刊)紙上で取り上げられた。
- 5) 本アンケート調査の結果については, 柴田「中国政府の原爆観, 中国青年のヒロシマ観——新中国建国50周年に考える——」(前掲『月刊 状況と主体』第286号, 1999年9月, pp. 76-94)を参照されたい。
- 6) 『中国新聞』, 1999年8月4日付朝刊。
- 7) 註6)に同じ。
- 8) 鎌田定夫「非核・不戦の世紀をどう拓くか——ハーグ平和10原則・平和宣言・国連軍縮京都会議から——」, 『ヒロシマ・ナガサキ通信』145号, 長崎の証言の会, 1999年9月, pp. 2-3。
- 9) 註6)に同じ。
- 10) 「被爆54周年非核の世紀を築こう」, 『中国新聞』, 1999年8月7日付朝刊。

〔資料1〕

広島平和宣言

戦争の世紀だった20世紀は、悪魔の武器、核兵器を生み、私たち人類はいまだにその呪縛(じゅばく)から逃れることができません。しかしながら広島・長崎への原爆投下後54年間、私たちは、原爆によって非業の死を遂げられた数十万の皆さんに、そしてすべての戦争の犠牲者に思いを馳(は)せながら、核兵器を廃絶するために闘ってきました。

この闘いの先頭を切ったのは多くの被爆者であり、また自らを被爆者の魂と重ね合わせて生きてきた人々でした。なかならず、多くの被爆者が世界のために残した足跡を顧みるとき、私たちは感謝の気持ちを表さずにはられません。

大きな足跡は三つあります。

一つ目は、原爆のもたらした地獄の惨苦や絶望を乗り越えて、人間であり続けた事実です。若い世代の皆さんには、高齢の被爆者の多くが、被爆時には皆さんと同じ年ごろだったことを心に留めていただきたいのです。家族も学校も街も一瞬にして消え去り、死屍累累(ししるい)たる瓦礫(がれき)の中、生死の間(はざま)をさまよひ、死を選んだとしてもだれにも非難できないような状況下であって、それでも生を選び人間であり続けた意志と勇気を、共に胸に刻みたいと思います。

二つ目は、核兵器の使用を阻止したことです。紛争や戦争の度に核兵器を使うべしという声が必ず起こります。コソボでもそうでした。しかし、自らの体験を世界に伝え、核兵器の使用が人類の破滅と同義であり、究極の悪であることを訴え続け、二度と過ちを繰り返さぬと誓った被爆者たちの意志の力によって、これまでの間、人類は三度目の愚行を犯さなかったのです。だからこそ私たちの、そして若い世代の皆さんの未来への可能性が残されたのです。

三つ目は、原爆死没者慰霊碑に刻まれ日本国憲法に凝縮された「新しい」世界の考え方を提示し実行してきたことです。復讐(ふくしゅう)や敵対という人類滅亡につながる道ではなく、国家としての日本の過ちのみならず、戦争の過ちを一身に背負って未来を見据え、人類全体の公正と信義に依拠する道を選んだのです。今年5月に開かれたハーグの平和会議で世界の平和を愛する人々が高らかに宣言したように、この考え方こそ21世紀、人類の進むべき道を指し示しています。その趣旨を憲法や法律の形で具現化したすべての国々そして人々に私たちは心から拍手を送ります。

核兵器を廃絶するために何よりも大切なのは、被爆者の持ち続けた意志に倣って私たちも、「核兵器を廃絶する」強い意志を持つことです。全世界がこの意志を持てば、いや核保有国の指導者たちだけでもこの意志を持てば、明日にでも核兵器は廃絶できるからです。

強い意志は真実から生まれます。核兵器は人類滅亡を引き起こす絶対悪だという真実です。

意志さえあれば、必ず道は開けます。意志さえあれば、どの道を選んでも核兵器の廃絶に到達できます。逆に、どんなに広い道があっても、一歩踏み出す意志がなければ、目的地には到達できないのです。特に若い世代の皆さんにその意志を持ってもらいたいです。

私たちは改めて日本国政府が被爆者の果たしてきた役割を正当に評価し援護策を更に充実することを求めます。その上で、すべての施策に優先して核兵器廃絶のための強い意志を持つことを求めます。日本国政府は憲法の前文に則(の)って世界各国政府を説得し、世界的な核兵器廃絶への意志を形成しなくてはなりません。地球の未来のために、私たちが人間として果たさなくてはならない最も重要な責務が核兵器廃絶であることをここに宣言し、原爆犠牲者の御霊(みたま)に心から哀悼の誠を捧(ささ)げます。

平成11年(1999年)8月6日

広島市長 秋葉 忠利

長崎平和宣言

核兵器、それは人類の滅亡をもたらすものです。54年前のきょう、8月9日午前11時2分、私たちのまち長崎は、ただ一発のプルトニウム型原子爆弾によって一瞬のうちに廃虚と化しました。数千度の熱線、強烈な爆風、恐るべき放射線に襲われた無数の人々がもたれ死にし、かろうじて生き延びた人々は、半世紀経った今もなお、心と体の傷をかかえて、不安と孤独に苦しんでいます。

私たちは、この地獄のような体験から、核兵器は絶対に許せないと考え、それ以来、核兵器の廃絶を世界に向けて訴え続けてきました。

昨年5月のインドとパキスタンの地下核実験以降、核兵器をめぐる世界の情勢は緊張の度合いを高め、ユーゴスラビア空爆に際して、NATO（北大西洋条約機構）側が核兵器使用を示唆したように、世界は危険な道をたどろうとしています。核保有国は、今なお時代錯誤の核抑止論に固執しています。

しかし、21世紀に向けた力強い動きも始まっています。「アポリシオン2000」や「ハーグ世界市民平和会議」など、核兵器廃絶をめざすNGO（非政府組織）の積極的な活動と平和を願う国際世論の高まりがあります。これらの力の結集が各国政府を動かすとき、核兵器の廃絶は必ず可能です。私たちは、20世紀を生きてきた人類の責任として、核兵器全面禁止条約の早期締結を訴え、世界の国々の指導者に対し、「核兵器廃絶宣言」を今世紀中に行うよう強く求めます。

今なお、地球上では戦争や地域紛争が後を絶ちません。これは、武力に訴えて自分たちの主張を通そうとする行いであり、最大の人権侵害、環境破壊です。私たちは、武力に頼らずに平和を築くこと、民族、宗教、文化の違いを互いに尊重し、認め合い、対話によって信頼を培うことの大切さを、世界に訴えます。

次に日本政府に求めます。昨年12月に国連総会で採択された、核兵器廃絶への具体的提案である「新アジェンダ決議」を受け入れ、被爆国として先導的役割を果たすべきです。条約締結が間近い中央アジア非核地帯に続き、北東アジア非核地帯の創設に努力し、核の傘を必要としない新たな安全保障の枠組みをつくってください。アジア・太平洋諸国に対する侵略と加害の歴史を反省し、日本国憲法の平和理念を守ることを誓い、真の相互理解に基づく信頼関係を築いてください。高齢化の進む国内外の被爆者のために、援護の充実に努めてください。

21世紀を切りひらく若い皆さん、あなた方が生きる新世紀が平和であるために、いま何をしたらよいのか、考えてください。飢えや貧困をなくし、環境を守り、人の命を大切にして、世界中の人々が協力しあえる社会をつくるために、いま出来る身近なことから、行動を始めてください。

昨年11月、長崎で開かれた国連軍縮会議は、「長崎を核兵器の惨禍に苦しんだ世界最後の被爆地とする」ことを決議し、私たちに大きな希望を与えました。長崎には、長い国際交流の歴史と悲惨な被爆体験があります。私たちは長崎を平和学習の拠点と位置づけます。被爆の実相と平和の願いを世界に発信し、世界の人々とともに平和の輪を広げます。

被爆54周年にあたり、原爆で亡くなられた方々のごめい福を心からお祈りいたします。

ここに、核兵器のない世界をめざし、さらに努力することを、長崎市民の名において国内外に宣言します。

1999年（平成11年）8月9日
長崎市長 伊藤 一長

〔資料 2〕

廣島和平宣言

二十世紀是戰爭的世紀，產生了惡魔的武器—核武器，我們人類還沒有從這威協中解放出來。然而，自從原子彈降落至廣島，長崎後的五十四年，我們想着由于原子彈而慘死的幾十萬人民以及所有的戰爭受害者，為廢絕核武器而不斷奮鬥着。

領導這場鬥爭的是很多勇敢的原子彈受害者以及跟他們有着同樣心情而為此行動的人民。尤其是，從眾多的被爆幸存者為世界留下的豐功偉績來看，我們不能不表示由衷的謝意。

被爆幸存者的貢獻有三種。

第一、他們剋服了原子彈所造成的地獄般的慘痛和絕望，仍然頑強地生活着。我希望青年人不要忘記老年的被爆幸存者們，遇難時和你們一樣的年青。家庭、學校、城市都在瞬間消失得無影無踪。堆積如山的瓦礫之中，他們徘徊在生死線上。雖然在生不如死的慘狀下，遇難者們却毅然選擇了生存的道路。他們的這種求生的意志和勇氣，我們都要銘記在心。

第二、他們阻止核武器的使用。每當發生地區沖突、戰爭、總有人說應該使用核武器。科索沃危機也是同樣。可是，當被爆者們將原子彈爆炸的親身體驗傳給世界講訴核武器的使用就等于滅絕人類的絕對惡，發誓廣島，長崎的悲劇絕不能再重演。他們的這種堅定的信念，才使人類至今沒做過第三次惡行。正因為如此，我們才有希望的未來，孩子們才有光明的前途。

第三、他們提出並實行了在原子彈爆炸死難者紀念碑上刻着的，日本國憲法所表明的“新”的世界觀拒絕對人類採取滅亡的復仇，敵對的態度。同時，承擔着日本國家的罪惡以及戰爭的罪惡，為了創造美好的將來，選擇了通向全人類的正義，信義的道路。今年五月，在海牙召開的和平會議上，全世界愛好和平的人民，指出了二十一世紀人類應走的方向。並向把這種精神用憲法，法律來加以法制化的所有國家以及人民表示衷心的敬意。

為了全面徹底廢除核武器，最重要的是我們必須繼續堅持被爆者的信念，且擁有廢絕核武器的強烈信念。如果全球都有這種信念甚至核保有國的領導人也具有這種信念的話，那麼，明天就會徹底銷毀核武器的。

強烈的意志來源於真實。這個真實就是核武器是導致人類滅亡的“絕對惡”。

只要有意志，就一定能走上光明大道。只要下定決心，不論選擇哪條道路，都能達成核武器的廢絕。與此相反，無論道路怎樣寬闊，如果不邁出第一步的話，也不能到達目的地。我期望特別是年輕一代應具有這種意志。

我們再度要求日本政府能公正地評價被爆幸存者所起的積極作用。對原子彈受害者採取更完善的援護措施。並且，請求日本政府具有廢絕核武器的強烈意志，把此作為最優先的政策來對待。希望日本政府堅持憲法前言的宗旨，說服世界各國政府必須形成全球性的廢絕核武器的志向。我在此宣布，為了地球的未來，作為人類最重大的任務是廢絕核武器，我從心裏對原子彈爆炸死難者謹表哀悼之意。

平成十一年（一九九九年）八月六日

廣島市長 秋葉 忠利

長崎和平宣言

核武器是導致人類滅亡的武器。在五十四年前的今天，八月九日上午十一點二分，我們的城市——長崎，僅由於一顆鈣型原子彈便在瞬間化爲了廢墟。几千度的熱線，強烈的沖擊波，可怕的光輻射襲擊着成千上萬人在痛苦掙扎中死去。好不容易留下來的幸存者們，在經過了半個世紀的今天，仍然因身心的創傷呻吟着，過着孤獨，不安的日子。

我們經歷了這地獄般的體驗，認爲核武器是絕對不可原諒的，歷來堅定不移地呼籲世界徹底銷毀核武器。

去年五月，印度以及巴基斯坦兩國進行了地下核試驗之後，圍繞核武器的國際局勢更加緊張起來了。從北約對南斯拉夫聯盟共和國的空襲時會打算使用核武器來看，世界面臨走行政機。擁有核武器的國家未放棄核威懾政策的是“時代錯誤”的落後想法。

但是，面向二十一世紀，強有力的運動也正拉開了序幕。例如，“廢絕核武器2000”，“海牙世界市民和平會議”等，以廢絕核武器爲目標的非政府組織（NGO）積極展開了活動，希求和平的國際輿論也高漲了。當他們的力量凝聚在一起，若能影響各國政府，核武器必能廢絕。作爲二十世紀的人類的責任，我們強烈要求早日簽訂全面禁止核武器的條約，並呼籲核國領袖在本世紀內能共同發表“廢絕核武器宣言”。

至今地球上，戰爭，地區性衝突仍然此起彼伏。這是訴諸武力而一意孤行的行爲，也是最大的人權侵害，環境破壞。我們倡導以和平方式解決國際爭端，相互尊重民族，宗教，文化的不同，重要的是通過對話來增進各國之間的相互信任。

其次，請求日本政府。採納去年十二月在聯合國大會上通過的對廢絕核武器的具體建議的“嚮着無核武器的世界必要新課題”的決議，作爲唯一的被爆國必須起到帶頭作用。在不久將會簽訂的中亞無核武器區的條約上，努力建立東北亞無核武器區，並創設不靠核保護傘的安全保障體制。反省對亞洲，太平洋各國的侵略以及加害的歷史，遵守“日本國憲法”維護和平的宗旨，建立本着國家之間真正的相互了解的信任關係。盡力對越來越高齡化的原子彈受害者進行完善的援護。

即將跨入二十一世紀的青年們，爲了新世紀是一個和平的世紀，你們認應該做些什麼呢？根除饑餓，貧困，保護環境，尊重人命，爲了想像和睦相處的社會，讓我們從身邊的小事開始做起吧。

去年十一月，在長崎召開的聯合國裁軍會議上作出的“讓長崎成爲全球最後的核武器爆炸地”的決議，給予我們很大的希望。長崎有悠久的國際交流歷史和不可言狀的悲慘的被爆體驗。因此，我們把長崎定爲“學習和平的據點”。向全世界傾訴被爆的真相以及和平意願，和世界人民一道促進和平。被爆五十四周年的今天，我們在心裏爲因原子彈而去世的人們祈禱冥福。

在此，以長崎市民的名義向國內外宣誓，爲了爭取無核武器的世界，我們要作出進一步努力。

一九九九年（平成十一年）八月九日
長崎市長 伊藤 一長

補記：

本稿脱稿後、1999年12月末、知友の中国瀋陽市在住の張玉祥・元遼寧大学教授(戦時中、旧広島高等師範学校に留学)から年賀状と共に1999年8月6日付け新聞『瀋陽晩報』が送られてきた。この新聞は発行部数30万部の夕刊紙であるが、その13面にはほぼ全面を使って〈彼女は広島原爆を体験した〉(原題「她親歷了広島原子彈爆炸」)と題する長文の記事が掲載されていた。

この記事には原爆のキノコ雲を背景に配した女性の写真があり、その女性は戦前、旧満州国から広島文理科大学に留学中、原爆に被爆した初慶之さんであった。筆者らは初女史とは何度か会ってインタビューを実施し、一部は文章にして紹介済であるが(小林〈忘れられた中国人原爆被爆者〉『中国往還』1991年所収、および〈ある中国人被爆者の悲哀 — 初慶之さんと再会して〉『中国新聞』1991年9月9日文化欄)、中国の新聞に、それも8月6日に、このような記事が出されたことはかつてない異例のことであった。

なぜなら、中国のマスコミはこれまで一切の原爆被害の実相、およびこれに関連した問題を伝えたことがなく、例外的に新中国建国直後にやはり旧広島文理科大学留学生だった由明哲氏の被爆体験を報道したことがあったが(『人民日報』1950年11月11日)、当時の政治状況を反映して「原爆恐るに足らず」の宣伝に利用するためであった。毛沢東の「原爆は張り子の虎」論が羽振りを聞かせていた時代であったからである。中国の被爆者の実態は長い間、ベールに包まれており、私どもの手によって明らかになった部分が多い。

いまその間の政治状況、ならびに中国の核認識、ヒロシマ・ナガサキ観の変遷について触れる余裕がなく、これについては他日に期せざるを得ないが、問題は過去一貫して核被害の実相を国民に知らせないばかりか、自国に被爆者が存在することさえ秘密にしていた中国が、昨年8月6日を境になぜに姿勢を変えたのか、まことに興味のあるところである。この原因、意識の変化についても早晚稿を改め問題にしたい。

今回は広島で被爆した一中国人留学生が被爆当時どのような体験をしたか、また帰国後、被爆者であることからどのような生活を余儀なくされたかを、『瀋陽晩報』

の記事を率直に読むことで理解するに留める。そのため、文中の事実誤認、あるいは記憶違いと思われる点については、入学年月以外はあえて訂正しなかった。

ついでながら述べると、広島で被爆した旧文理大留学生で犠牲になった人は6人、生き残って帰国した人は4人であるが、帰国者のうちすでに2人が死亡、現存者は初慶之さんと王大文氏（男性、南京在住）のみである。

なお、記事の見出しは便宜上以下のように変更した。貴重な記事を送ってくださった張玉祥教授に謝意を表したい。

〔資料〕

原爆を体験した旧広島文理大中国留学生

伊 非（『瀋陽晩報』特約記者）

1945年8月6日、米国が広島に投下した一発の原子爆弾は、数万の生命を踏みこじった。九死に一生を得たのはごく少数の人たち、そのなかには中国人留学生5名の姿もあった。

1999年5月20日、5名のうちの一人、由明哲教授の訃報が北京から伝えられると、北国・長春に居住する80歳近い高齢の老婦人が暗然として涙した。隣近所の人々は問い質して、初めて知った。何を隠そう、彼女こそ、あの原爆の惨禍を生き抜いた中国人留学生5名中の唯一の女性、初慶芝、彼女は由明哲教授の同学だったのである。

1999年7月30日、吉林省吉林大学の職員住宅において、ただ一人、広島原爆を生き抜いた中国女性、初慶芝さんに対面した。彼女は今昔を思い比べて、感慨無量の様子であった。

広島の中国人留学生

50余年の歳月の流れは、あのとき25歳だった初慶芝の髪を真っ白に変えていた。その皺だらけの顔には、苦勞をなめ尽くした人生の跡が刻まれている。

まずは、初慶芝さんに語ってもらおう。

「1920年、私は吉林省公主嶺市の辺鄙な農村に生まれました。後に、生まれ故郷が匪賊の擾乱に遭ったため、一家そろって「新京」、いまの長春に引っ越ししました。1934年、新京国民高等学校に合格、家政を教わりました。1937年冬、選抜試験を経て、公費派遣で奈良女子大学（当時の校名は、奈良女子高等師範学校—記者）に留学、日本語を2年間、勉強してから歴史地理を専攻しました。広島に行ったのは、1934年（1943年の誤り—記者）9月です。国立広島文理科大学（現広島大学）に入って、世界史を学びました」

初さんは、当時、広島にいた中国人留学生は全部で21名だったと記憶する。1945年初頭、戦局は日本に極めて不利、米国に制空権を掌握され、日本の空の防衛力の弱体化は、誰の目にも明らかであった。東京・京都などの主要都市は絶えざる空襲にさらされた。ただ、商業港であった広島は、軍事施設が存在しなかったこともあって、米軍の攻撃目標にならずに済んでいた。それゆえ、広島ならまずまず安全だと、誰も楽観していたのである。しかしある日、米軍機から落とされた爆弾が広島大学構内に着弾、女子学生1名が犠牲となった(1945年6月30日、中国人女子留学生、張静が爆死—訳者)。事ここに至って、漸く一同もここが安全地帯ではないことを自覚、中国人留学生のうち10名が相次いで広島を後にし、結局、同地に留まったのは、彼女を含めて11名であった。

原爆の生き証人

原子爆弾によって、心身に消えることのない傷を負った初慶芝さんは、あの恐るべき光景、必死の思いで死神の手から脱出した体験についてこう証言する。

「1945年8月6日正8時、ほかの同学と定刻通りに登校、卒業論文に追われていた私は直接、資料調査に閲覧室へ向かいました。8時16分、突如、鳴り響く空襲警報。しかし、私たちはこんな音には慣れっこ、空襲警報は日常茶飯事だからです。安全な場所へ避難しようとする人など皆無でした。私もそのまま資料を調べていたのです。淡紅色の光線が窓外でピカッとひらめいたのは、空襲警報の後でした。山を動かし海を覆すかの如き凄まじい轟音が、閲覧室の窓ガラスを木端微塵に打ち砕く。私は背後にあった書架の下敷きになりました」

彼女がいた閲覧室は、当時、広島で唯一の鉄筋コンクリート二階建ての建物、そのおかげで倒壊は免れたものの、木造建築物はことごとく全壊し、多くの人が圧死した、と初慶芝さんは述懐する。

書架と書籍の山の中を脱け出し立ち上がった初慶芝は、屋外に走り出て愕然とする。あれほど晴れ渡っていた空の異様な暗さ。四周に立ちこめる煙。めらめらと燃え盛る炎。道には、熱さのあまり狂ったように飛びはねる人。うつむけば、自分の白衣には、いっぱい血痕が……。そこで初めて自分の左腕が動かないことに気付

いた。彼女は電車で宿舎に帰ろうと、一目散に駅を目指して走った。けれども、路上で目にしたのは、さらに恐ろしい地獄絵図。電車は焼け焦げ、車内の乗客は立っただまま、あるいは座ったまま、炭と化していた。見えるのは、どこもかしこも崩壊した建物と炎々たる烈火ばかり、聞こえて来るのは、いつ果てるとも知れぬ泣き声、叫び声、うめき声の世界であった。彼女は、家の梁に太腿をはさまれた人が、助けを求めて絶叫しているのを目撃した。救助に何人かが駆け寄ったものの、梁はびくともしない。死ぬくらいなら、いっそ斧で太腿を切断してくれ、と彼は哀願したが、こんな非常時に斧などどこにあるか。その人は到頭、無惨にも焼け死んでいったのだった。

かくなる惨状を目の当たりにして、初慶芝は生きた空もなく、どこに行けばよいのか、見当もつかなかった。前方に救護所があると聞いて、人の流れについて歩を速める。たどり着いたのは、大きな空き部屋の前。室内に入ってみると、そこにいたのは、腕がない人、足を失った人、焼かれて血だるまになった人……、彼女は軽傷の方だった。どれくらい経ただろう、やっと彼女の「病」を診察してもらう順番がまわってきた。医師は彼女の左腕の両側に添え木をあて、脱臼した腕を整骨してくれた。「白衣を着用していたことに加えて、外に出たとき、衝撃波と放射線が過ぎ去っていたから、助かったんですよ」、医師はこう言った。

日が暮れてきた。広島の夜空には依然として火柱が立っていた。食べる物もない。生存者は焼け死んだ鳥を刻んで、鳥肉スープをこしらえた。初慶芝も一腕それを口にした。三日目、同じ学校の日本人が教護所で彼女を発見、初慶芝の同学である王大文（現在、南京東南大学停年教師）にそのことを告げてくれた。かくして無事を確かめ合った初慶芝と王大文は手分けして、ほかの中国人留学生の捜索に取りかかるも、捜し当てたのは3名（一人はすでに故人、一人は日本在住、もう一人は由明哲）、残り6名はどうしても捜し出せなかった。彼らは一人残らず爆死、熱愛中のカップル組も犠牲となった。

広島文理科大学に在学していた由明哲は次のように述べている。「私たちは、米軍機の轟音や爆弾の炸裂音を聞くと、怖じ気付くどころか、かえって胸のすく思いがし、元気が出たものです。爆撃されているのは、ほかならぬ日本。日本軍はわが祖国を侵略中であり、私たちは亡国奴となった恥辱に苛まれていたのですから」。

8月6日朝、あの大爆発より早く、由明哲は実験室に入って実験に取りかかろうとしていた。日本人の同学が彼に駆け寄って、「米軍機3機、飛来」と告げたのは、8時頃だった。5分後、閃光が走ったかと思うと、続けて「ドーン」という耳をつんざく大音響。由明哲は地面にたたき付けられた。四つん這いになって起き上がると、割れたガラスの破片で全身血まみれだった。よろよろしながら室外へ出る。廃墟のなかに、本館がぼつんと聳え立っていた。砕け散った煉瓦と瓦は、通常では考えられないほど粉々になっており、大時計の針は8時15分で停止していた。太陽は顔を隠し、空はどんよりと暗い。

爆心から半径100m以内では、花崗岩さえ融解した。万代橋の欄干とアスファルトの道路には、歩行者10名の影が残されていた。

その日は、勤勞奉仕の日に当たっていたので、街路には緑色の国防服に身を包み、背に子供をおんぶした女性が多かった。濃色の服装は放射線を大量に吸収、彼女らは一糸まとわぬ丸裸となり、皮膚全体が焼け焦がされた。彼女らは、時ならず「ああ、寒い!」「ああ、暑いわ!」と最期の悲鳴をあげ、息絶えた。

広島は「死の街」さながらであった。道を歩きに歩いて、漸く一人か二人の生者者に出会える始末。大難を生き延びた人たちは遠くから互いを目で確認すると、性別、面識の有無に関係なく一様に走り寄り、頭を抱えて泣き崩れた。

王大文も悪夢でも語るかのように、「あのとき」の自身の体験を、彼らに披露した。

8月6日朝7時、王大文は普段通りに起床、食事をとってから、教室に滑り込んだ。先生はまだ来ない。彼は早速、力学の教科書を開いて、昨日の復習を始めた。

突然、飛行機の轟音が響き、接近して来た。王大文が窓を開けて、外を眺めようとしたその瞬間、まばゆい屈折光が窓ガラスの反射光線のなかで一閃、彼は本能的に両手で両目を覆った。それに続く雷鳴の如き爆音。彼は地に倒れて気絶した。

廃墟から這い出して来た留学生が王大文につまづき、彼は意識を取り戻した。校舎は全壊していたが、巨大な事務机のおかげで命拾いをした。幸い、気を失ったのが机の下だったからである。実際、机の上には、太い横梁が伸び掛かっていた。彼は茫然自失の体で立ち上がる。その体は全身、鼻と耳の中まで埃と泥まみれであった。蹠蹠としながらも、壁の裂け目をたどって外への脱出を試みる。行く手には真っ黒な煙塵が立ちこめ、視界は3m以下、彼は手探りで留学生会館へ向かった。

どこもかしこも壁と生け垣の残骸だらけの道。根元からへし折れた、大橋の太い鉄筋コンクリート製の橋脚。木陰を恵んでくれた緑樹は、一葉もない炭に。手で触れれば、ぼろぼろと崩れ落ちる。ぐんにやりとねじ曲がり、スクラップの山と化した路面電車。扉の手すりの側には、焼け焦げた死体。その人の炭化した「手」は車の扉をつかんだまま。あちこちに漂う死臭。

相望橋のたもとにあった留学生会館は、木造二階建てのこじんまりとしたものだったが、建物全体が川のなかに崩れ落ちていた。中国人留学生2名、董家林と彼の恋人、張秀英は行方が知れなかった。

王大文は山頂目指して走り出した。山嶺に至ったのは、午後1時頃、ぐるりと麓の広島市街を見渡すと、巨大な火柱がほぼ全体を包みこんでいた。山の頂の青天井とうららかな日差し。山上と山下では、まるで陽と陰の別世界であった。

初慶芝さんの証言によれば、10数名の中国人留学生のうち、広島原爆を生き延びたのは、由明哲、董永増、初慶芝(女)、王大文、朱定裕、わずか5名であった。後日、彼らは市内に比べて原爆被害が小さかった郊外に転地する。検査の結果、初慶芝の白血球と血小板がひどく減少していることが判明、免疫力は失われ、体はめっきり弱っていた。怪我と風邪が絶えなかったが、これは被爆者に広く見られた症状であった。当時は、医者も治療法が分からず、毎日、ブドウ糖を注射するだけ。若者、頑健な者なら、それで持ちこたえられたが、老いて病弱な人の場合、せつかく焼死、爆死、圧死を免れたにもかかわらず、しばらくしてから息を引き取るケースが続出した。初慶芝とは言えば、体調は徐々に快方に向かったものの、平復には長時間を要し、結局、1949年まで待たなくてはならなかった。

被爆からしばらくの間、人々はそれが原子爆弾だとは知らず、甚大なる被害は、米国による大量の爆弾投下によって引き起こされたものとばかり思っていました、と初慶芝さんは証言する。確かに、当時、日本のマスメディアも「米軍が新式爆弾を投下」としか報道しておらず、人々が真実を知ったのは一週間も後であった。死亡者数に至っては、正確な数値は発表されず仕舞いであった。報道を見ると、1946年8月10日、広島市が調査を経て発表した死亡者数は118,611名に達し、また、1976年11月、広島・長崎両市が国連に提出した広島の死亡者は14万人にもものぼっている。

被爆者の苦難

初慶芝は1946年9月、晴れて大学を卒業するが、折しも中国は内戦状態、帰国は断念せざるを得なかった。1950年の初め、日本の新聞で中華人民共和国成立の報を知って欣喜雀躍した彼女は、時を移さず帰国を申請する。しかし、日中戦争終結から間もなく、朝鮮戦争が勃発、中国は米国を盟主とする国連軍と敵対状態にあった。帰国は不可能、もはや密航しか道は残されていなかった。1950年、由明哲、初慶芝らは英国の貨物船で大連港に帰着、帰国後、彼女は山東師範大学に助手の職を得る。1963年春には、故郷の吉林大学へ教師として赴任し、1984年、同校で定年を迎える。

1950年代、「国際スパイ」「階級異端者」などのレッテルを張られた初慶芝さんは、長らく不遇な生活を強いられた。結婚後、一年も経たないうちに、夫は彼女を棄てて出て行った。「文化大革命」中の1969年には、農村へ下放させられ、1979年、吉林大学に復職するまで、その改造は10年にもおよんだ。農村時代に再婚を果たしたものの、一年もせぬうちに、今度は夫に先立たれた。生涯、子供に恵まれず、いまは養女の初曉明と暮らす。

1980年代に入って、初慶芝さんは何度か広島市長から招請状を受け取った。毎年8月6日に広島市が挙行する「原爆死没者慰霊式並びに平和祈念式」への出席要請であった。初慶芝さんは旧地を再訪し、限りなき感慨にとらわれた。

半世紀の時間が流れた。初慶芝さんは「あの日」の体験を思い出すたび、ほかの数名の被爆者、生き残った同学たちを懐かしく思い出すという。今日、5名の被爆者のうち、彼女と王大文だけが健在である。いま、彼女の心の奥底には、敬虔なる祈りがある。最後に、それを聞こう。

「われらが中華人民共和国成立50周年に当たる今日、私たちは世界の人々に、戦争が人類にもたらすものはただ一つ、災難であることを知らせなくてはなりません。二度と戦争を起こさず、永遠に平和の光で人類を照らしましょう」

(『瀋陽晩報』、1999年8月6日)